

人文・社会科学

問題冊子

指 示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題(1-40)があります。配点は80点満点です。解答カードには表裏あわせて50の解答欄がありますが、41以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味80分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて80分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、**解答カード**の定められた枠の中に**鉛筆**を用いてマークして下さい。それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの**問題冊子の余白**を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

(余 白)

[ア]

道徳的想像力という言葉を開いたことがあるだろうか？この言葉に初めて触れる場合、その意味がすぐには理解できないかもしれない。あるいは、すでに触れたことがあったとしても、あらためて語の意味について考えると、ある種の奇妙さを感じるかもしれない。この用語を奇妙で理解し難いと感じるのは、道徳と想像力という2つの異質な概念が結合されているような印象を持つからではなかろうか。そうした印象は、道徳と想像力についてのそれぞれのイメージに起因している。道徳とはなすべき行為の厳格なルールの体系、確立された行動のきまりであり、これに対して想像力とは、ルールやきまりに拘束されず、むしろ現実世界の制約から解放された、自由に奔放な思考や空想の能力を意味する。道徳を厳格な規範として捉え、なおかつ想像力を規範の制約なき空想的思弁とする見方にたてば、道徳的想像力は、異質なものを結合させた奇妙な概念として映るはずである。

道徳的想像力という言葉が奇妙にみえることの背景には、哲学の長い歴史のなかで、想像という人間の精神能力の位置づけが低いものであったという事情があろう。例えば、古代ギリシアの哲人プラトンは、著書『国家』のなかで詩人を痛烈に批判している。批判の矛先は、詩人の仕事が偽物を本物らしく描き出すことに向けられていた。プラトンの批判に即していえば、想像力とは、真理にかならずしも基づかない、それゆえ理性の善導なくしては、人を誤った認識と行為に導く危険な能力でしかない。また、近代に入っても、想像力に対する低い位置づけや猜疑のまなざしは受け継がれている。例えば、フランシス・ベーコンは、『学問の進歩』のなかで、「想像力に本来的に、あるいは相応しく属する学問はひとつとしてみられない」と述べ、真理に到達する独自の知的能力としての地位を想像力には認めないという立場を示している。また、トマス・ホブズによると、想像とは「衰退しつつある感覚の残像」であり、複数の残像の偶発的な結合をとおして実在しない空想物を生み出す源泉である。

このように古代ギリシアのみならず近代においても、想像力は、真理の認識にとって頼りにならない人間の知的能力として理解されてきた。もちろん、想像力は、芸術の領域においては[イ]でもありえた。例えば、ベーコンやホブズと同じく近代初頭のイギリスで活躍したシェークスピアは、喜劇『真夏の夜の夢』のなかで、「恋するものは、狂ったもの同様、頭が煮えたぎり、冷静な理性には理解しがたい、ありもしないものを想像する。狂人、恋人、そして詩人は、皆、想像力の塊だ」という台詞をその脚本の中に登場させている。この台詞は、想像力と非理性的なものとの近親性を指摘しつつも、他方で、創作活動の源泉としての想像力について積極的な価値を示唆している。劇作家かつ詩人であったシェークスピアからすれば、現実の制約や因習を超越する想像力は、真理から離反する虚偽の元凶ではなく、むしろ真善美をめぐる創造の源泉であり、創造の産物を享受するための能力でもあった。事実、シェークスピアは、史劇『ヘンリー五世』の冒頭で、観客に想像力を発揮するよう訴えている。舞台を戦場に

変えたり、華麗な王侯貴族を出現させたりするのも、また長い年数の経過を1時間に凝縮できるのも、すべて想像力のおかげなのである。ここで注意すべきであるのは、創作活動を生み出し、また享受する能力として想像力が積極的に評価されるようになったとしても、伝統的な想像力観が依然として維持されている点である。つまり、現実から遊離する人間の知的能力という捉え方は変わらないのであって、たんに評価が[ウ]にすぎず、想像力が現実世界のわれわれの理解につながる理路は、明らかにされていない。

想像力は、現実の理性的な理解とまったく関係がないのだろうか？想像力は、創作活動にたずさわる人々の専有物であり、他の点では精神生活と関わりがないのだろうか？この問いに答えてくれるのが、相対性理論で有名なアルバート・アインシュタインの言葉であろう。「想像力は知識よりも重要である。というのも、知識は限定されているが、それにたいして想像力は世界全体を包含して、進歩を刺激して発展を生み出すからである。厳密に言えば、想像力とは、科学的研究の真の要素である。」偉大な科学的発見をなしとげた科学者の言葉は、科学的探求にとっての想像力の重要性を認識させてくれる。とはいうものの、アインシュタインの言葉は、想像力がどのように道徳の領域に関係するのかという問いに答えるものではない。

この問題を解くために、ハンナ・アレントの議論に目を向けてみよう。ドイツで生まれ、米国に亡命したユダヤ人であるアレントは、そもそも理解には想像力が必要不可欠であると考えていた。アレントによれば、想像力がなければ、理解はひたすら慣習に従うほかはない。われわれが生きる現実世界を理解し、批判的に思考しようとする場合、想像力は必要不可欠の要素となる。なぜならば、現実世界の理解や批判的思考には狭い自分の視点を広げること、つまり他者の視点から現実をながめる作業が必要であり、この作業を可能にするのがまさしく想像力だからである。批判的思考とは、想像の力を用いて、潜在的に存在するあらゆる他者に光をあてる営みである。

実は、現実世界の理解や批判的思考にとっての想像力の重要性を認めることは、行動のルールとしての道徳観の見直しにもつながる。他者の視点から現実をながめる想像力を欠くならば、ルールとしての道徳は、社会的に受け容れられている因習の遵守、自分で考え決める過程を欠いた同調的行為となる危険性をはらむことになろう。この場合の道徳的行為とは、追従を意味し、[エ]と変わらないであろう。

アレントにとって、思考を欠如させた同調的行為の代表的体现者とは、ナチス政権下でのユダヤ人虐殺で指揮的役割を演じ、1961年にイスラエルで有罪判決を受けた元ナチス親衛隊のアドルフ・アイヒマンであった。ヒトラーのユダヤ人絶滅政策を遂行した高官に対し、アレントが驚愕しつつ見いだしたのは、命令への服従を第一と考える平凡きわまる人物であった。では、大虐殺という犯罪をもたらしたのはなにか？アレントによれば、それは思考の欠如であり、他者の視点から状況と行為を吟味する道徳的想像力の欠如であった。このように考えればアイ

一連の流れを、比喩を使って描写する。奴隷制は「監獄」である。捕われた者は、いくつもの鉄の重いドアによって閉じ込められ、ドアは百個の鍵によって施錠され、ドアの鍵はそれぞれ異なる人間が保持している。なおも人々は、監獄からの捕囚者の脱出をもっと困難にする方法について思案している（1857年6月26日の演説から要約）。このような〈奴隷とされた人々の視点〉は、隷従の絶望的な状態を描くことで、奴隷制が「道徳的にみて間違っている」ことを明らかにする道徳的想像力の働きに貢献している。

ところで、比喩を使ったリンカンの議論に対して、奴隷とされた人々の具体的経験への言及があまりみられないという指摘がありうるだろう。それは適切な観察である。リンカンが〈奴隷とされた人々の視点〉を用いて訴えかける聴衆は、有権者を中心とする公衆であり、そのため奴隷とされた人々の苦難への共感や同情に訴えることよりも、比喩を用いて苦難を強いる支配の構造の不正をあげ、この構造に加担する人間の責任を問うことに力点が置かれているといえる。さらにいえば、苦難の具体的なあり様を描くという課題は、「何千もの心を引き裂き、何千もの家族を粉碎し、無力で傷つきやすい黒人の人々を逆上させ、絶望に駆りたてた苦悩と絶望」を描いた『アンクル＝トムの小屋』が果たしており、リンカンと聴衆の多くは、この小説をよく知っていた。

とはいえ、リンカンが比喩を使って描いた苦難を、より具体的に理解することは、〈奴隷とされた人々の視点〉の内実を豊かにし、道徳的想像力をより確かなものとするであろう。奴隷状態がもたらす苦難の核心は、自分が権利主体ではなく他者の所有物であり、いつでも売買の対象となる商品にはかならないという点にある。ここから、鞭打ちなどの過酷な処罰、肉体的、精神的および性的暴力、強制移住といった種々の苦難が派生してくるのである。こうした苦難のひとつに、家族離散がある。売買や強制移住の対象となることは、家族離散の危険と背中合わせであることを意味する。ヘザー・ウィリアムズの『引き裂かれた家族を求めて』は、奴隷とされた人々の家族離散の経験を克明に記録している。「母親たちに抱きしめられてた赤ん坊が乱暴に奪い去られて、儲けになるとにらんだ商人の手で売られたのさ。子供たちは、兄弟姉妹から引き離されて、二度と会うこたあない。もちろん、みんな泣いたさ。家畜のように売られるとき泣かないと思うのかい」（元奴隷のテリア・ガーリックの回想）。家族離散は親と子の別離に限らず、夫と妻の別離でもあり、奴隷とされた人々を絶えず脅かし、絶望のどん底に突き落とすものであった。場合によっては、悲劇的な結末が生じた。リンカンが奴隷制反対論を展開し始めた1856年、マーガレット・ガーナーは、家族とともに逃亡したが、逃亡先で捕まる間際に、自分の子供が再び奴隷になるよりは、むしろ死んだほうがましであると考え、2歳児の娘を自分の手で殺害した。この凄惨な出来事は、のちにトニ・モリスンの小説『ピラヴド』の題材となったが、一人の母親に過酷な選択を強いる奴隷制の非人間性を如実に物語っている。

第2の視点は、〈将来の国民の視点〉である。この視点は、奴隷制が道徳的に間違っているだけでなく、将来的に社会に甚大な害悪をもたらす「致命的な猛毒」でもあることを明らかにする。そのような害悪を、リンカーンは以下のように表現する。「奴隷状態の鎖を当然視するがよい。自分の体が鎖につながれるための準備をすることになろう。自分の周りの人々の権利を踏みにじることに慣れるがよい。自分自身の独立の精神を失い、これから出現する狡猾な圧政者に適した臣民となるだろう」（1858年9月11日の演説）。このように奴隷制が生み出す害悪とは、他者を人間扱いせず圧政のもとに隷属させて支配の座にある人々のうえにも、圧政が降りかかるという逆説的な帰結を意味する。この逆説は、奴隷制が他者の自由の侵害に対する感受性を麻痺させることで、自分自身の自由の侵害に対しても鈍くなることから生まれる。だからリンカーンはいふ。「わたしは奴隷になりたくないのだから、奴隷主にもなりたくないのだ」（1858年8月1日の日誌）と。このように〈将来の国民の視点〉は、奴隷制の〈ブーメラン効果〉とでも呼びうる負の副次的作用に目を向けるように、われわれの道徳的想像力に働きかける。

〈将来の国民の視点〉に関して、リンカーンの議論が圧政の脅威を過大に誇張するもので、実証的な観点からみて妥当性を欠く思弁なのではないか、という疑念が生じるかもしれない。なるほど、アメリカの奴隷制は政治体制としての圧政を実際に生み出した、とする主張には、大きな疑問符がつくであろう。では、圧政を政治制度の意味に限定せずに、支配と従属の社会関係として広義に理解した場合はどうだろうか。その場合でも、奴隷制を支持する人間のうえに圧政が降りかかってくるという〈ク〉〈ブーメラン効果〉の主張は、容易に展開できる類いの議論ではなく、綿密な議論の準備が必要であるように思われる。

しかしながら、もし〈将来の国民の視点〉に基づく議論を、奴隷制が廃止されても悪しき影響が存続し、そのため支配と従属の関係が再生産されるという意味にとるならば、その経験的妥当性について考える余地はありそうである。例えば、1960年代にアフリカ系アメリカ人の公民権が確立された時、リンカーンの奴隷解放令から実に100年が経過していたことは、支配従属の関係という負の遺産の〔ケ〕や根深さを痛感させるものであろう。この事態は、人種的偏見や差別はどの場所やどの時代にも存在する、という一般論に還元できない。ある学術論文によると、奴隷制の負の遺産は現代にも看取される。その論文の統計調査によると、（コ）奴隷制廃止からすでに150年が経過する現代の南部諸州において、1860年の時点で奴隷の保有数が多かった郡であればあるほど、その郡に現在居住する白人住民は、黒人に対する否定的な感情と政治的に保守的な態度を示す傾向があるとされる。支配従属の関係の根深さは、奴隷制を支えた価値の上下関係が、差別される側で内面化され再生産される点にも表われる。前述の小説家トニ・モリスンの最初の小説の邦題は『青い眼がほしい』（*The Bluest Eye*）であるが、原題を直訳すれば「最も青い眼」である。この小説は、自分の眼が青い眼になること、否、だれ

よりも青い眼になることを切望するアフリカ系アメリカ人の少女が、最後には狂気に陥るとい
う悲劇をとおして、奴隷所有者とその子孫が持つ価値や美の尺度が、奴隷の子孫に受容され再
生産される事態を描き出す。

モリスンは、「小さな白人の少女の青い眼に対する小さな黒人の少女のあこがれ」の核心部
分にあるものを、「おぞましきもの」と表現する。この「おぞましきもの」は、支配従属の関
係の持続、あるいはリンカンの言葉でいえば圧政の持続にほかならない。(サ)「おぞましきも
の」は、リンカンが本来考えた〈将来の国民の視点〉を批判的に考察し、新たな他者の視点か
ら思考するという、道徳的想像力の必要性という課題をわれわれに突きつける。このことは、
道徳的想像力の批判的吟味もまた、他者の視点を不可欠とする精神能力の働きであることを示
唆している。

[シ]

ここで注意しておくべきことは、道徳的想像力という行為が個人の精神活動の次元にとどま
るものではない点である。そもそも道徳的想像力は、他者の視点を要素とする点で、他者の存
在を前提としており、それゆえ社会的な性質を帯びている。さらにいえば、リンカンが行った
奴隷制廃止の政治的決定の事例が如実に示すように、道徳的想像力には、現実への働きかけと
その帰結という次元が付随し、それゆえ帰結に対する責任という別の問題も浮上する。つまり
道徳的想像力は、いっさいの責任から免除された個人の思弁的楽しみや恣意的な空想ではあり
えない。

ところで、道徳的想像力が導く行為の帰結は、意図したごとく望ましいものかもしれないが、
場合によってはそうでないかもしれない。このような〈意図せざる帰結〉は、わたしたちの私
的な生活でも、さらにはより多くの人々が関わる組織、社会、政治の局面でも多々みられる。
こうした〈意図せざる帰結〉は、道徳的想像力が働きかける行為や決定に大きな実行力や影響
力、権力が関われば関わるだけ、規模と深刻さの点で甚大なものとなりうる。当初は意図して
いなかったはずの犠牲やコストが生じることもある。道徳的想像力は、こうした側面に対して
も可能な限りの推測や予見を要求するものであろう。しかし、多くの文学の古典が描いてきた
悲劇の数々は、人間が関わる事象には〈意図せざる帰結〉の呪いから逃れる術が確保されてい
ないことを示唆する。

リンカンも、この人間的宿命をよく理解していた。このことは、かれ独自のシェークスピア
論から明らかである。実はリンカンは、シェークスピアの作品の愛読者であり、『リチャード
三世』や『ヘンリー八世』といった史劇と『リア王』、『ハムレット』、『マクベス』の悲劇を好
んだ。とくに注目に値するのは、リンカンが『ハムレット』に関して、「生きるべきか死ぬべ
きか」という有名な台詞で始まるハムレットの独白よりも、「おお、この罪の悪臭、天にも達

しよう」で始まるクローディアスの独白のほうが優れていると考えていた点である（1863年8月17日付の書簡）。ハムレットの台詞は、クローディアスが、自身の兄にしてハムレットの父でもある王を殺害して自ら王となり、その王妃を妻としたことに対して、自分の命を賭して父の復讐を果たすか否かという煩悶を表わしている。クローディアスの場合、かれの台詞は、自らの野心にみちびかれて犯した罪におののきながらも、悔い改めることのできない状況、犯された罪といまだなされざる罪のあがないに挟まれた我が身の苦境を表現するものである。

おお、この罪の悪臭、天にも達しよう。人類最初の罪、兄弟殺しを犯したこの身、どうしていまさら祈ることができよう。祈りたいと思う心はいくら強くとも、それを上まわる罪の重さに押しつぶされる。同時に二つの仕事をはたさねばならぬもののように、思うばかりでなにごともしはたさず、二つとも手をつけぬまま、呆然とたちつくすのみだ。この呪われた手が、兄の血にまみれて、硬くこわばってしようと、それを洗い清めて雪の白さにする恵みの雨が天にはないのか？（中略）犯した罪は過去のものだ。だがどう祈ればいい？「忌まわしい人殺しの罪を許したまえ」？だめだ、それは。人殺しの罪を犯した結果、手に入れたものをいまなお身につけていて、王冠も、野心も、そして王妃も、いまだ手ばなさずにいて、その罪が許されようか？

この独白への関心を示すリンカンの書簡が書かれたのは、南北戦争で最大の激戦となり、多大な犠牲者を生んだゲティスバーグの戦いが北軍の勝利に終わり、1ヶ月がようやく経過した頃であった。この状況を考慮にいれて、さらにハムレットとクローディアスの違いに目を向けると、リンカンがハムレットよりもクローディアスに関心を寄せる理由ないし背景が理解できる。たしかに、ハムレットもクローディアスも、人殺しという、古来から罪の典型例としてみなされてきた行為に関与し、さらには国王殺しの点でも共通している。だがハムレットの場合、国王殺しは復讐を目的とする義父殺しであるのに対して、クローディアスの場合は、権力欲と政治的野心を動機とする兄弟殺しである。ともに人殺しかつ国王殺しであるが、大義があるのは明らかにクローディアスではなく、ハムレットの方であろう。しかしクローディアスに関心を寄せるからといって、リンカンが南北戦争を大義なき戦いとみていたとは、到底考えられない。では、リンカンの関心はなにに由来するのだろうか？

おそらく鍵となるのは、クローディアスの人殺しが兄弟殺しであったという点である。「兄弟殺し（fratricide）」を意味する英語は、「同胞殺し」も意味する。北軍と南軍に分かれて戦った南北戦争とは、まさに同国人同士の殺し合い、つまり同胞殺しにほかならない。またリンカンは、しばしば南部諸州の人々を「南部の同胞兄弟たち」と呼んでいたのである。こうした点を考えると、リンカンが、兄弟＝同胞殺しへの関与という観点ゆえに、クローディアスに関心

を持つのも、当然であるように思われる。クローディアスが、逃れえない兄弟殺しの罪に懊悩したように、北軍の最高責任者たるリンカンもまた、予想を超える犠牲者をもたらした同胞殺しという事実に対する重い道徳的責めを感じていたのであろう。事実、南北戦争の転換点ともいわれるゲティスバーグでの戦いで勝利した際、「神と正義は我が方にあり」との確信を強めることで、人殺しという行為の道義的問題を看過しようとする姿勢は、リンカンには微塵もみられない。リンカンは、すでに北軍の勝利が確実視される状況での第二次大統領就任演説（1865年3月4日）のなかで、両陣営が同じ聖書を読み、同じ神に祈ったという点を指摘しながらも、北軍の勝利と神の摂理を完全に「ス」を拒絶する考えを表明している。

以上のことから推測すれば、クローディアスに対するリンカンの関心が示唆するのは、デビッド・プロムウィッチがいうように、自らの政治的野心がもたらす代償を認める誠実さであろう。さらにいえばそれは、スティーブン・スミスが指摘するように、いかに大義の戦いであろうとも避けることのできない責任の重みを引き受ける態度である。この責任は、組織の頂点に立つ者の場合には幾倍にも加重された固有の責任となるとはいえ、なんびとも逃れることのできないものである。この責任の「セ」は、道徳的想像力が逃れえぬ制約であり、ひいては全知全能ならざる人間に課された限界を示唆していよう。

こうした限界の認識は、集团的決定に関わる責任者であれ、そうした決定に従うか否かを迫られる人間であれ、「所詮はうまくいかないのが世の常だ」といったような開き直りや冷笑的態度の理由となるものではないし、「この因果な私の役割を誰も理解してくれない」といった英雄的孤独の陶醉や「ソ」の慰めを与えるものでもない。むしろそれは、自らの営みの厳粛な責任をあらためて認識させ、〈意図せざる帰結〉がもたらした望ましくない事態の改善や解消という任務を課すものであろう。それはまさに、リンカンが第二次大統領就任演説の最後に述べた任務であった。その言葉は、「国民の傷を包帯でつつみ、戦闘に加わり倒れた者、その寡婦、その孤児を援助し、労わるために、わが国民の内に、またすべての諸国民との間に、正しい恒久的な平和をもたらし、これを助長するために、あらゆる努力をいたそうではありませんか」というものであった。

これまでの考察を想起しながら、この言葉に接するならば、われわれがそこに見いだすのは、内戦後の和解と復興という次なる政治的課題への抱負だけではないはずである。むしろ、言葉の背後から立ち現われてくるのは、道徳的想像力の持つ変革を生み出す可能性、そこに付随する予見の不可能性と責任の不可避性、こうした人間的可能性と制約性を認める知的誠実さと道徳的廉直ではなからうか。われわれの生きる現代のどの場所においても、少なくとも自分を取り巻く状況を冷静に直視する勇気を持つならば、これらの事柄の重要性や必要性を痛感することになる。そしてこの種の認識も、さまざまな場所の他者、過去・現在・未来にわたる他者を想起することで獲得されるものであるがゆえに、最終的には「タ」によって可能となるのである。

参考文献

- ヘザー・アンドレア・ウィリアムズ『引き裂かれた家族を求めて』彩流社、2016年。
- ウィリアム・シェークスピア『ハムレット』白水社、1983年。
- ウィリアム・シェークスピア『ヘンリー五世』白水社、1983年。
- ウィリアム・シェークスピア『真夏の夜の夢』角川書店、2013年。
- アイラ・バーリン『アメリカの奴隷制と黒人』明石書店、2007年。
- プラトン『国家』岩波書店、1979年。
- トマス・ホップズ『法の原理』岩波書店、2016年。
- トニ・モリスン『ピラヴド』集英社、1998年。
- トニ・モリスン『青い眼がほしい』早川書房、2001年。
- Avidit Acharya, Matthew Blackwell, and Maya Sen, “The Political Legacy of American Slavery,” *Journal of Politics* 78, no.3, 2016: 621-641.
- Hannah Arendt, *Denktagebuch*. Piper Verlag, 2002.
- Hannah Arendt, *Lectures on Kant's Political Philosophy*. University of Chicago Press, 1992.
- Hannah Arendt, *Responsibility and Judgment*. Schocken Books, 2003.
- Francis Bacon, *The Major Works*. Oxford University Press, 1996.
- David Bromwich, *Moral Imagination*. Princeton University Press, 2014.
- Albert Einstein, *Cosmic Religion and Other Opinions and Aphorisms*. Dover Publications, 2012.
- Don E. Fehrenbacher, *The Slaveholding Republic*. Oxford University Press, 2001.
- Abraham Lincoln, *Speeches and Writings*. Library of America, 1989.
- Steven B. Smith, “How to Read Lincoln’s Second Inaugural Address,” in Steven B. Smith (ed.), *The Writings of Abraham Lincoln*. Yale University Press, 2012.
- Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin, or, Life among the Lowly in Three Novels*. Library of America, 1982.

(このページは空白です。)

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを1つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (42)

(ア) (イ) (ロ) (ハ)

-
1. 見出しとして [ア] に入る最も適しているものは次のうちのどれか。
 - a. 哲学の歴史における想像力の位置づけ
 - b. 道徳と想像力の異質性
 - c. 道徳的想像力の必要性
 - d. 道徳的想像力の制約

 2. 道徳的想像力という言葉に対して感じる「ある種の奇妙さ」と同様の奇妙さを惹起する題名を次から選べ。
 - a. 『教室内カースト』
 - b. 『1 Q 8 4』
 - c. 『細雪』
 - d. 『花より男子』

 3. [イ] に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
 - a. 無視されるもの
 - b. 徹底的に否定されるもの
 - c. 評価が定まらないもの
 - d. 積極的に評価されるもの

 4. [ウ] に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
 - a. 逆転している
 - b. 回避されている
 - c. 保持されている
 - d. 曖昧にされている

5. 次の著作家のうち、シェークスピアの同時代人といえるのはどれか。
- a. チェーホフ
 - b. セルバンテス
 - c. ヴォルテール
 - d. ダンテ
6. シェークスピアの全作品を翻訳し、『小説神髓』や『当世書生気質』などの作品で知られる日本の小説家は、次のどれか。
- a. 尾崎紅葉
 - b. 森鷗外
 - c. 二葉亭四迷
 - d. 坪内逍遙
7. ハンナ・アレントによれば、想像力が批判的思考に不可欠な要素であるのはなぜか。以下から最も適切なものを選べ。
- a. 批判的思考には自由な思考力が求められるから
 - b. 批判的思考には論理的な一貫性が重要だから
 - c. 批判的思考には空想力が必須とされるから
 - d. 批判的思考には多様な観点を持つことが要請されるから
8. 行動のルールとしての道徳観について、この資料文の筆者の解釈に最も近い文章は次のうちどれか。
- a. 社会における運用に関して批判的思考を欠くと、思慮と分別を欠いた追従行為を下支えする規範となる危険性がある。
 - b. 社会的慣習に従うことを個人にうながし、かつ不変のものである。
 - c. 社会生活を送るうえで必要とされる行為を定める規範体系であり、疑問を挟む余地のないものである。
 - d. 長い伝統の中で確立されてきたがゆえに、社会の構成員一人一人が遵守するべきものである。

9. [エ]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 意図的で反道徳的な行為
 - b. あらゆる権威の拒否
 - c. 権威づけされた他者への服従
 - d. 自己中心的な行動原理
10. 見出しとして [オ]に入る最も適しているものは次のうちのどれか。
- a. リンカンの奴隷制反対論における道徳的想像力
 - b. リンカンの奴隷制反対論の限界
 - c. 奴隷制の負の遺産
 - d. リンカンの奴隷制反対論の持つ現代的意義
11. アメリカ独立宣言の起草者は次のうちどれか。
- a. ジョージ・ワシントン
 - b. トマス・ジェファソン
 - c. トマス・ペイン
 - d. パトリック・ヘンリー
12. 日本最初の人権宣言といわれる宣言を表明した組織は次のどれか。
- a. 立志社
 - b. 青鞥社
 - c. 全国水平社
 - d. 明六社
13. アメリカの「南北戦争」は、本来「内戦」を意味する。南北戦争が終結して3年後に日本が経験した内戦は、次のどれか。
- a. 西南戦争
 - b. 薩英戦争
 - c. 戊辰戦争
 - d. 下関戦争

14. イギリスはアフリカ大陸においても植民地化を進めたが、イギリスの植民地でなかった国を次の中から選べ。
- a. マラウイ共和国
 - b. ガーナ共和国
 - c. ケニア共和国
 - d. ギニア共和国
15. [カ]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 皮肉な対照
 - b. 当然の帰結
 - c. 自明の理
 - d. 不測の事態
16. アメリカ独立宣言が出された以降の出来事で時系列の最初に起きたものを選べ。
- a. ムガル帝国滅亡
 - b. アヘン戦争
 - c. ボストン茶会事件
 - d. イギリスのシンガポール領有
17. [キ]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 調和
 - b. 矛盾
 - c. 展望
 - d. 歴史
18. 「多様な他者の視点」を言い換える語句として最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 絶対的な視点
 - b. 相対的な視点
 - c. 普遍的な視点
 - d. 観念的な視点

19. 筆者の説明によれば、「奴隷とされた人々の視点」はそうではない他者に何を想起させることに貢献したか。以下より最も適切な文章を選べ。
- a. 黒人も白人と同じ人間であるという人としての同類意識
 - b. 人間には区別がありそれぞれ階級に属しているという現実
 - c. 奴隷制は、人間の非平等性に立脚するものであり正当な論拠を持つという偏見
 - d. 奴隷制は、イギリスからの自由を得るために温存されたという認識
20. この資料文の筆者が示唆する奴隷制における支配構造の不正とは何か。筆者の意見に最も近いものを選べ。
- a. 白人が黒人に対する優越感にひたっていること
 - b. 奴隷商人が不当な価格で奴隷を売買していること
 - c. プランテーション経営者が莫大な利潤を得ていること
 - d. アンクル・トムが公衆に対して苦難の経験を語らざるをえないこと
21. 「比喩を使って描いた苦難を、より具体的に理解すること」とは、例えばどのような事柄か。資料文の内容から喚起される具体例として適切ではない記述を次の中から選べ。
- a. 商人が儲けになると考えたら兄弟姉妹であろうと関係なく引き裂かれて売却される可能性があること
 - b. 捕われの者は肉体的、精神的、性的な暴力に無防備にさらされる状態にあること
 - c. 捕囚者の家族が離散してしまう状況がいつなんどき起こっても不思議はないということ
 - d. 奴隷の体は百個もの鍵によって施錠されているということ
22. 国家の将来的な展望という観点から、奴隷制が社会に甚大な害悪をもたらす「致命的な猛毒」である理由は何か。筆者の意見に最も近い説明を選べ。
- a. 親子心中のような悲劇的な結末を招く状況を構造的に作り出すから。
 - b. 一家離散や親子の別離のような事柄が日常茶飯事として発生するから。
 - c. 他者の尊厳に対する感受性を麻痺させ、翻っては自分自身の身に対する侵害についても国民が無批判になってしまうから。
 - d. 圧政に対して国民が慣れてしまい独立の精神が保てなくなる恐れがあるから。

23. 下線部(ク)〈ブーメラン効果〉に関して、筆者の考えに最も近い説明は、次のどれか。
- a. さまざまな観点からの検討なくしては、ブーメラン効果の有無について明確なことはいえない。
 - b. ブーメラン効果は、まったく存在しないことが明らかである。
 - c. ブーメラン効果は、部分的に存在することが確認できる。
 - d. さまざまな観点からの検討を十分に行えば、ブーメラン効果の存在を主張することが可能となる。
24. アメリカで制定された一連の公民権法に関して、適切な記述は次のうちどれか。
- a. 投票権における平等を実現する法制度は施行されなかった。
 - b. マルコム Xらによって進められた公民権運動を背景にしている。
 - c. アラバマ州で起きたモンゴメリー・バス・ボイコット事件が制定への契機のひとつとなった。
 - d. 公共の場におけるサービスの享受について、人種、肌の色、宗教などの違いによる区別を法文化した。
25. 日本における公民権の行使の例として適切ではないものは次のうちどれか。
- a. 労働者が勤務時間中に都知事選挙の投票に行くことを雇用者に請求する。
 - b. 18歳の高校生が衆議院議員選挙の投票を行う。
 - c. 交通事故を目撃した兄が裁判所に証人として出廷する。
 - d. 20歳の青年が参議院議員に立候補する。
26. [ケ]に入る語句として最も適したものを選び。
- a. 持続性
 - b. 残忍性
 - c. 特殊性
 - d. 回帰性

27. 下線部（コ）の「奴隷制廃止からすでに150年が経過する現代の南部諸州において、1860年の時点で奴隷の保有数が多かった郡であればあるほど、その郡に現在居住する白人住民は、黒人に対する否定的な感情と政治的に保守的な態度を示す傾向がある」との主張から論理的に導きだせる命題は、次のうちのどれか。
- a. 1860年の時点で奴隷保有数が多かった南部の郡は、奴隷制とは無関係に、もともとアフリカ系アメリカ人に対する否定的な感情があった。
 - b. 1860年の時点で奴隷保有数が少ない南部の郡では、現在の住民におけるアフリカ系アメリカ人の比率が低く、それゆえかれらに対する偏見を生み出す人種的な脅威を白人住民が持つ可能性が低くなる。
 - c. 1860年の時点で奴隷保有数が多かった南部の郡には、アフリカ系アメリカ人に対する否定的な感情を持つ白人が多く移住する傾向がある。
 - d. 1860年の時点で奴隷保有数が少ない南部の郡であればあるほど、アフリカ系アメリカ人に対する否定的な感情や政治的に保守的な態度が減少する。
28. 〈将来の国民の視点〉の議論に立脚すると、再生産が危惧される状態とは何か。資料文の筆者の意見に最も近い説明を以下から選べ。
- a. 本来、抑圧者から押し付けられたはずの価値観を奴隷の子孫が受容し、内面化してしまう状態
 - b. あこがれの気持ちが強くなりすぎて狂気に陥ってしまう状態
 - c. かつての奴隷所有者の美的尺度がその子孫に受け継がれていく状態
 - d. 圧政によって支配関係が継続する
29. 日本社会においても近年顕著な問題となっている格差について、世代をまたいで再生産される貧困のことを何と呼ぶか。
- a. 貧困線
 - b. 相対的貧困
 - c. 貧困の連鎖
 - d. 絶対的貧困

30. 下線部（サ）の『『おぞましきもの』は、リンカンが本来考えた〈将来の国民の視点〉を批判的に考察し、新たな他者の視点から思考するという、道徳的想像力の課題をわれわれに突きつける』について、そう考える筆者の理由に最も近いものは、次のどれか。
- a. リンカンの提示する〈将来の国民の視点〉が、結局のところ、社会のさまざまな領域で偏見と差別の圧政が継続するのに貢献したから。
 - b. リンカンの提示する〈将来の国民の視点〉が、奴隷制が廃止されたあとに、南部で隔離政策が確立するという事態を予測できなかったから。
 - c. リンカンの提示する〈将来の国民の視点〉が、人種偏見を支える価値の尺度を内面化するというアフリカ系アメリカ人自身の視点を考慮に入れていないから。
 - d. リンカンの提示する〈将来の国民の視点〉には、アフリカ系アメリカ人に対する人種偏見を支える価値の尺度が、いかにおぞましいものであるかについての認識が欠如しているから。
31. 見出しとして [シ] に入る最も適しているものは次のうちのどれか。
- a. 道徳的想像力の可能性の根拠
 - b. 道徳的想像力をめぐる制約と責任
 - c. 政治と暴力の本質的關係
 - d. 政治における悲劇性
32. 〈意図せざる帰結〉についてこの資料文の筆者はどのように考えているか。最も近い意見を次の中から選べ。
- a. 最大限の能力を使用して、できる限り逃れるべき罪科である。
 - b. 人間が人間である限り逃れようがない顛末であり、受け止めざるをえない宿命である。
 - c. 時と場合によってはその程度が甚大なものになるので注意して回避する必要がある。
 - d. 個人の空想の産物であるので責任問題は発生しない。
33. 歌舞伎の一演目である「義経千本桜」は源氏と平家をめぐる〈人間的宿命〉を題材としている。この宿命に関わる世界遺産は次のうちどれか。
- a. 巖島神社
 - b. 姫路城
 - c. 法隆寺
 - d. 白神山地

34. この資料文の筆者の解釈によると、リンカンがハムレットよりもクローディアスに関心を寄せたのはなぜか。以下の中からあてはまるものを選べ。
- a. 大義なき戦いに身を投じたクローディアスに同情したから
 - b. 罪のあがないがいまだなされていないクローディアスに憤りを感じたから
 - c. クローディアスは自らの欲によって引き起こした罪の重さを感じながらも道義的問題については看過しているから
 - d. リンカンもクローディアスも互いに「身内」殺しの罪に悩む運命をたどったから
35. [ス]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 重ね合わせること
 - b. 分離させること
 - c. 無視すること
 - d. 無関係なものとする
36. [セ]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 不可能性
 - b. 不確定性
 - c. 不可避性
 - d. 両義性
37. [ソ]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 夜郎自大
 - b. 四面楚歌
 - c. 自己憐憫
 - d. 利他主義

38. この資料文の筆者が指摘するところの、自らの政治的行動がもたらした代償を認めて責任を引き受けようとするリンカンの誠実さは、何から推察できるか。筆者の意見に最も近いものを選べ。
- a. 第二次大統領就任演説で表明された和解と復興への意志
 - b. ハムレットではなくクローディアスに親和性を感じていた共感力
 - c. 南部諸州の人々を同胞と呼んでいた事実
 - d. 自らの行為の帰結を予見していた先見性
39. [夕]に入る語として、最も適切なものは次のうちどれか。
- a. 政治権力の行使
 - b. 道徳的想像力の発揮
 - c. 思想信条の堅持
 - d. 可能な限りの推測や予見をなしうる自由な思考
40. 「道徳的想像力」と対極にある考え方を表す語句を以下の中から選べ。
- a. 呉越同舟
 - b. 疑心暗鬼
 - c. 虚心坦懐
 - d. 唯我独尊